

ぶつきょうつうしん  
仏教通信

ほうおんこう いぎ  
『報恩講の意義』

がつごう  
11月号

「報恩講」とは、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人のご命日を縁として行われる仏教行事です。聖人は、「阿弥陀如来は、善悪に関わらずいのちあるもの全てを漏らさず救う」という、阿弥陀仏による「他力」の救済を説かれました。その教えは現代を生きる私達の心にも響くものだと思います。

今現在も、ロシアとウクライナの長期化する戦争や、イスラエル軍がガザ地区に潜伏するハマスに対する報復攻撃から始まり周辺国との武力衝突へと拡大していった戦争が続いています。いのちを削り合う「戦争」が起きてしまうと、敵を殺戮する行為の攻撃対象は敵兵士だけでなく敵国の市民にも広がり、多くの犠牲者が出てきます。この怖い現実を前に、親鸞聖人の教えは、私たちに何を問いかけているのでしょうか？戦争になると、善と悪の境界線は非常に曖昧になり、それぞれの立場で、「自分達の戦闘行為は自国民や領土を守る正義であり、悪の敵国に屈してはならない」とお互い主張し合い、先人から受け継いできた文化・景観・産業だけでなく、国民のいのちまでも失われていきます。戦争という暴力や破壊によって解決できるものはなく、その戦争が終わった後に残るのは「憎しみ」と「悲しみ」しかありません。私たちは、この世界において何者とも関係せず一人ですべて生きていく訳ではありません。仏教では「縁」の思想を説き、この世界は互いにつながり、支え合いながら、この「私」が存在していると気づかせてくれます。報恩講は、単なる儀式ではありません。この報恩講の日に、私たちは、親鸞聖人の「他者により生かされ、阿弥陀如来によって救われる」という「他力」の教えを心に刻み、今現在も世界で続いている戦争に向き合う必要があります。この自分一人では存在できない弱い「私」を支えてくれている「他力」に気づき、すべてのいのちを大切にすることを育んでいかなければなりません。

親鸞聖人が説いた「他力」の思想は、実は多くの宗教に見られる普遍的な価値観です。キリスト教の「神の愛」、イスラム教の「アッラーの慈悲」など、様々な宗教において、人間は自らの力だけでは生きることができないという考えが共通して見られます。異なる言語や教義で表現されていても、根底にあるのは、すべての生命に対する「思いやり」と「共生」の精神であり、「赦し」の思想です。報恩講は、私たちが自分自身を見つめ直し、より良い生き方を探求するための機会になればと念じています。「怒り」「憎しみ」を少しでも軽減し、他者を「ゆるす」ことができる平和な世界の実現は、私達一人ひとりの願いのはずです。その願いを少しずつでも叶えるためにも、互いに協力し、共に歩んでいく心を育んでいきましょう。

がつしょう  
合掌



こんねんど ほうおんこう がつ にち きん おこな  
今年度の報恩講は11月15日(金)に行います。

しょうがくぶらいはいいいんかい  
小学部礼拝委員会